

「一粒の麦」

ヨハネによる福音書 12:20-26

寒い日が続いておりますが、暦の上では一昨日 2 月 4 日は「立春」でした。寒さももう少しの辛抱です。今年は、雪国の地方は、大雪で大変だったようです。私も金沢と弘前という雪国で 30 年ほど過ごしてきましたので、雪国の人たちの労苦と春を待つ気持ちがよく分かります。そういうことから、この時期になりますと、私はいつも「まばたきの詩人」と呼ばれた水野源三さんの「かくれている」という詩を思い起こします。

「緑も花もない冬の庭には / 神の恵みはないのだろうか / 北風が吹き雪が降る冬の庭には / 神の恵みはないだろうか / かくれている、かくれている / 雪の下に土の中に / 神の豊かな恵みが」

この詩を造られた水野源三さんは、皆さんもご存知だと思いますが、小学 4 年生の時に赤痢による高熱から、脳性麻痺になり、手足を動かすことも言葉を発することも出来なくなり、まばたきを合図に、お母さんが示す「あいうえおの 50 音図」から一字一字を拾って、数多くの詩を作られた方です。この「かくれている」という詩も、そういう寝たきりの状態で雪に覆われた冬の庭を見ながら、雪の下土の中に春の息吹が宿っている、と詠った詩(うた)です。しかし、この詩は単に自然の恵みを詠った詩ではなく、キリスト者としての希望を詠った詩だと思います。人生の厳しい冬の季節の中で、「神の恵みはないのだろうか」と思えるような時でも、神さまの恵みは常に備えられていると、神さまの愛と恵みをほめたたえている詩だと思います。

神さまの愛と恵みは、いつも目に見える形や、肌で実感できるような形で有るとは限りません。「北風が吹き、雪が降る冬の庭」、「神の恵みはないのだろうか」と思えるような厳しさの中にも、「神の豊かな恵み」が「かくれて有る」のです。

今日の聖書の箇所は、イエスさまが過ぎ越しの祭りのためにエルサレムに入城された時の記事です。少し前のところ(12 節以下)を見ると、祭りに来ていた大勢の群衆がナツメヤシの枝(前の訳では「しゅろの枝」)を手にもって「ホサナ、主の名によって来られる方に、祝福があるように」と、まるで王様を迎えるように歓迎した様子が描かれています。しかしそのユダヤ人たちの歓迎は、イエスがラザロを復活させたという噂を聞いた群衆の興味本位の反応であって、心から主イエスを慕ってのものではありませんでした。この群衆は後に、祭司長たちに扇動されて、「イエスを十字架に付けろ」と叫ぶようになるのです。祭司長やファリサイ派の人々は、多くのユダヤ人たちが、自分たちを離れて、イエスのもとに集まるのを妬み、イエスを無き者にしようとの計画を立て(11:53)、「イエスの居所が分かれば届け出よ」との命令まで出していました(11:57)。イエスさまは、そのことを承知で、ロバの子にまたがってエルサレムに入城

されたのです。それは旧約の預言(ゼカリヤ 9:9)を成就するためでした。このイエスさまの「エルサレム入城」は、十字架の死を覚悟した上での、苦難に向かったの道行であり、ここから、イエスさまの最後の一週間が始まるのです。それは、イエスさまにとって、まさに厳しい「冬の季節」なのです。

その厳しい冬の真ただ中で、イエスさまは、今日の 23 節にありますように、「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われたのです。それはどういうことでしょうか？ イエスさまもまた、凍り付いたような「雪の下土の中」に「神の豊かな恵み」のしるしを見たからです。そのしるしとはなんでしょうか。

今日の 20 節以下を見ると、そのエルサレムの祭りに、何人かのギリシャ人が礼拝のために来ていて、この人たちが、イエスさまにお目にかかりたいと言って訪ねて来たということが記されています。この人たちは当時としては珍しく、ギリシャ人(異邦人)でありながらユダヤ教に改宗して、ユダヤの地に住んでいたものと思われます。この何人かのギリシャ人たちが、弟子のフィリポのもとに来て、「お願いします。イエスさまにお目にかかりたいのです」と頼んだというのです。そこでフィリポは、弟子の間であるアンデレに話し、フィリポとアンデレと一緒にイエスさまにそのことを伝えたのです。12 弟子の中で、なぜここにフィリポとアンデレの名が出てくるのかよく分かりませんが、ある註解書は、この二人の名前だけがギリシャ名で、おそらくこの二人は、イエスの死後、ギリシャ人に伝道するようになったことと関係があるのではないかと推測しています。それはともかくとして、イエスさまはこの二人の弟子を通して、数人のギリシャ人たちが会いたいと、訪ねて来ているという知らせを受けたのです。

それを聞いた時に、イエスさまは「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われたのです。イエスさまはこれまで、この福音書の中で、何度も「わたしの時はまだ来ていない」ということを語ってこられました。そのイエスさまが、数名のギリシャ人が訪ねて来たことを聞いて、「わたしが栄光を受ける時が来た」と言われたのです。これは、どういうことでしょうか。

イエスさまにとって「神の国の福音」は、ユダヤ人だけのものではなく、ギリシャ人をはじめすべての異邦人にまで及ぶべきものであり、それこそ全世界の全ての民に与えられる「神の豊かな恵み」でした。数名のギリシャ人がその神の国の福音を求めて、訪ねて来たということの中に、イエスさまは、いよいよその恵みの時が来たという<しるし>を見たのです。それは、神さまの栄光が現れる時ですが、御子イエス・キリストにとっても、「栄光を受ける時」であったのです。

そこでイエスさまは、24 節で「はっきり言うておく」と念を押して言われたのです。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結

ぶ」と。これは、よく知られている有名な言葉です。一粒の麦は、そのままでは一粒のままですが、よい地に蒔かれて、一旦「死ぬ」ことによって、そこから新しい芽が出て、それが育って穂が出来、その穂の中にたくさんの麦の実が実るわけです。

イエスさまはこの譬えで何を言おうとしているのでしょうか？ お分かりのように、ご自分の十字架の死の意味についてです。神さまの救いの御計画は、まずユダヤ人が救われ、それからギリシャ人を始めとする異邦人に福音が伝えられ、世界の全ての人々がその救いの恵みにあずかることでした。そのために、イエスさまは遣わされて来たのですが、そのイエスさまの務めは、人々の罪とすべての重荷を負って、十字架の苦難と死を担うことでした。イエスさまは、そのような神さまから定められた苦難と死の時を「自分の時」として自覚され、その「時」に向かってこれまで歩いて来られたのです。そして、今、ギリシャ人(異邦人)が救いを求めて来たことの中に、いよいよその時が来たと言われたのです。

ここで、注目すべきことは、イエスさまがそのご自分の苦難と死の時を、「栄光を受ける時」として捉えておられることです。イエスさまにとって、ご自分の苦難と死は、神さまの救いの御業が実現し、神さまの栄光が表わされる時であったのです。そしてその時が、ご自分の「栄光を受ける時」でもあるのは、その死が滅びではなく、「復活」によって、すべての人の罪を贖い、救いをもたらすことになるからです。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」。イエスさまはこの言葉によって、今こそ、自分の苦難と死の時が来たことを明らかに示すと共に、それは、終わりではなく、新しい命の始まりであり、すべての人々が神の救いにあずかり、永遠の命にあずかる新しい時の始まりだ! ということを明らかに示されたのです。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」。主イエスは、こう言われた後、さらに弟子たちに言われました。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」。この言葉は、大変厳しく、そして誤解を招くような言葉です。

「自分の命を愛し」、大事にすることは大切なことです。「自分の命を憎み」粗末にするなどということは、あってはならないことです。命の大切さは、イエスさまご自身がこれまで強調してこられたことです。だからこそイエスさまは、多くの病人をお癒しになり、死人を復活させることまでなさいました。それにもかかわらず、なぜイエスさまは、ここで「自分の命を愛する者は、それを失う」とか「自分の命を憎む者は、それを保つ」と言われるのでしょうか。

実はイエスさまは、これと同じようなことを、マタイ・マルコ・ルカ福音書の中でも

語っておられます。どういうところで語っておられるかという、イエスさまが弟子たちに、最初の「受難予告」をされた直後です。つまりイエスさまが、「これからエルサレムで多くの苦しみを受け、殺され、3日目に復活する」と語られた後、ペトロが「とんでもない、そんなことがあってはなりません」とイエスさまをいさめ、イエスさまから「サタン引き下がれ」とお叱りを受けます。そのときイエスさまは「自分の命を救いたい者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者はそれを救うであろう」(マルコ 8:35)と言われたのです。ここでイエスさまが問うておられることは、「命」そのもののことより、「命」の使い方、つまり私たちの「生き方」のことを問題としておられるのです。

弟子たちは、イエスさまの苦難と死を前にして、自分の出世、自分の幸せ、自分の身の安全のことしか考えていませんでした。イエスさまは、そういう弟子たちに向けて、「自分の命だけを愛する者は、それを失う」と言われたのです。私たちは、どうしても「自分が、自分が」と自分のことにのみ執着して、他者に無関心であったり、排除したり、裁いているようなことが多いのですが、そういう自分の狭い罪の殻を脱ぎ捨てるのが、ここで「自分の命を憎む」という言葉で言われていると思います。

苦難と十字架の死を前にして、イエスさまは、命はただ大事に守ってそれに執着するためだけのものではなく、神さまから与えられたものとして、神さまの喜ばれる目的のために用いられ、「それを保って、永遠の命に至る」ことが何よりも大切だと諭されたのです。「使命」とは、「命を使う」と書きます。神さまから与えられた命を、どう使うか、何のために生きるのか、ということが問われているのです。

イエスさまは、最後に、26節でこう言われました。「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる」と。

私たちの命は、ただ自分の欲望を満たし、自分を満足させるためではなく、十字架と復活の主の恵みにあずかり、主に従って神と隣人に仕え、世界のみんなの救いのために用いられるべきだ、というのです。それが主と共にある「永遠の命」にあずかることなのです。

私たちは、まさに吹けば飛ぶような小さな「一粒の麦」です。しかも、今なお厳しい冬の寒さの中、いつ止むともしれないコロナ禍の中に閉じ込められているような状態です。しかし、この厳しさの中にも、「神さまの豊かな恵み」が隠されているのです。「わたしは復活であり、命である」と言われる主イエス・キリストが常に共にいて下さり、私たちの重荷を共に担ってくださるのです。私たちもまた主イエス・キリストに従って、「多くの実を結ぶ」者でありたいと願います。 アーメン